

横山ゆずり作 **「トウルー・フレンズ」**

<前編>

(効果音) (授業終了のチャイム。教室のガヤ。)

隆史 おい、帰ろうぜ。

敏行 おう。おれ、腹減った。何か食ってかない？

隆史 行く行く。カズ、お前も行くだろ？

志村一樹 ……。

隆史 おい、一樹！

一樹 え、何か言ったか？

隆史 どうしたんだよ、ボケっとして。腹減ったから帰りに何か食ってこうって言ったの。また寝ぼけてんのか？ もうとっくに授業は終わってるんだぜ。

一樹 違うよ。おれはね、考え事してたの、考え事。

敏行 ふうん。どうせまた、テニス部の美由紀ちゃんのことでも考えてたんだろ？

一樹 バーカ、お前と違うの。おれさ、もしかしたら引っ越すかもしれない。

隆史 え、本当かよ。どこに？

一樹 福岡。おやじが転勤になったんだ。

敏行 そりゃまた遠いな。じゃ一樹も転校しちゃうわけ？

一樹 多分な。うちはおやじもおふくろも九州だから、転勤って言うより国に帰るって感じみたいでさ。特におふくろなんて、実家のすぐ近くだから喜んじやってたよ。

敏行 へえ。お前だけこっちに残れないの？

隆史 そうだよ。カズがいなくなったら、やっぱ寂しいよな。

ナレーション おれは志村一樹。青春高校の2年生。成績は中の下といったところ。スポーツは、自分で言うのもなんだが、まあいい線いっていると思う。彼女、なし。悪友、多数あり。とまあ、こんな平凡な高校生活にちょっとした事件が持ち上がったのは、おやじの転勤がきっかけだった。初めは一家そろって引っ越すという話だったが、おれは2年後の受験のことを考えると、このまま東京にいたほうが有利だということで、結局一人に残ることになった。おふくろは、まだ高校生のおれに独り暮らしをさせるのをかなり心配していたが、おれは、大学に入ればどっちみち下宿するんだから、と説得し、ついに自由な一人暮らしを手に入れたのだ。

隆史 やったじゃん、一樹。いいなあ、自由な生活。

敏行 ほんとほんと。うるせえ親はいないし、門限はないし、あーあ、うちのおやじもどっか転勤になっくんないかなあ。

隆史 何調子いいこと言ってんだよ。…だけど一樹、やっぱ一人はいいだろ？

一樹 もう最高だね。今まで、よくあんなうっとうしい家族と一緒にいられたと思うぜ。

敏行 言ってくれるよなあ。おい、お前。その開放感を独り占めする気じゃないだろうな。
おれたちも招待してくれるんだろ？

一樹 おお、もちろん。いつでも泊まりに来いよ。

隆史 そうこなくっちゃ。

一樹 但し、なんか食うもん持って来いよ！

敏行 おう、任せろって。

ナレーション こうして、週末になるとおれの部屋は、悪友たちのたまり場になったのだ。そして
おれは、一人暮らしの寂しさどころか、開放感に思い切り浸っていた。

(効果音) (教室のガヤ)

一樹 おう、潤。久しぶりだな。

相沢潤 カズ、元気か？ お前がサッカー部やめちゃってから会ってないもんな。お父さん
やお母さん、福岡だっけ？ お前も急な一人暮らしで大変だろ。メシとか、どう
してんの？

一樹 うん、近くにコンビニもあるし、何とか間に合わせてんだ。それよりさ、潤。一人
っていいぜえ、気楽で。土曜の夜は、大体クラスのやつが2、3人は泊まりに来
るしな。お前も来いよ。盛り上がるぜ。

潤 ああ、そのうち遊びに行くよ。

一樹 ちょうど明日も飲み会やるんだぜ。来ないか？

潤 おれは飲まないから。まあ、もう少し落ち着いたら、寄らせてもらうよ。じゃあな。

ナレーション 彼、相沢潤は、幼稚園の時から幼なじみだ。やつの家は、両親ともクリスチャ
ンなので、子供のころから教会に通っている。中学校の時には、突然「僕は宣
教師になる」なんて言い出したまじめなやつ。おれもガキのころは、一緒に教会
学校に通って、カードやお菓子をもらったりしたっけ。まあ最近はおれも、友達
付き合いやら遊ぶのに忙しくて、潤とも教会ともごぶさただった。相変わらず週
末には野郎ばかりの宴会で盛り上がる日々。ところがそんなある土曜日のこと
――。

(効果音) (みんなでワイワイ飲んでる。缶ビールを開ける音など。)

一樹 ほら、ビール足りてるか？

隆史 もっと飲めよ。

一樹、隆史、B そら、一気、一気！

隆史 おれ、ちょっと便所。気持ちわりい。

敏行 飲んだら吐くな。吐くなら飲むなあ。

(効果音) (ドサリと床に倒れる音。)

敏行 パーカ。お前、そんなところで寝るなよお。

隆史 ううっ！（苦しいうめき声）

一樹 おい、大丈夫か？

敏行 おい、しっかりしろよ。

一樹 大丈夫か？

(効果音) (救急車のサイレン)

ナレーション その夜、調子に乗って飲みすぎたおれたちは、かなり酔っ払っていた。ついに一人が急性アルコール中毒で病院に担ぎ込まれる始末。次の日、おれのほか全員の親が学校へ呼び出された。もちろん、おれも教頭と学年主任からひどくしかられた。

先生 何ということをしたんだ、お前たちは。一步間違ったら、命を落とすところだったんだぞ。聞くところによると、ここ数か月、ああいうバカげた騒ぎを繰り返していたそうじゃないか。高校生の分際で、何てことだ。

一樹 すみません…。

先生 いや、今回のことは、“すみません”では済まんぞ。明日、緊急職員会議を開いて、お前たちの処分を話し合うことになっているが、最悪の場合を覚悟しておくんだな。

一樹 それって、退学ってことですか？

先生 まあ、そういう線もあり得るってことだ。

一樹 そんな…。

先生 大体、高校生が親元を離れて一人暮らしをするなんてこと自体、非常識なんだ。本当なら、ご両親に来ていただきたいところだが、まあそうもいかんだろうから、電話でもよく話し合っておきなさい。職員会議の結果が出たら、学校からの正式に連絡するつもりだ。

ナレーション とんでもないことになってしまった。一人暮らしの自由さから、ちょっとはめを外してみるつもりが、こんなことになるなんて思ってもみなかったのだ。「親になんと言えればいいんだろうか。退学になったら、おふくろ泣くだらうな。」そんなことを考えていると、ふとほかの仲間のことが気になった。

(効果音) (電話の呼び出し音)

一樹 あ、もしもし、あの志村ですけど、隆史君いますか？

隆史の母 (フィルター音) 志村君？…ああ、隆史はもう寝ちゃったんですよ。

一樹 あ、そうですか。分かりました。

(効果音) (受話器を置く音。続いて電話の呼び出し音。)

一樹 あ、もしもし、志村ですけど、浩一郎君…

浩一郎の父 (フィルター音) 志村君？ 君か、うちの浩一郎を悪い道に引っ張り込んだのは。もう誘わないでほしいね。

(効果音) (フィルター音)(先方で受話器を置く音)

一樹 あ、もしもし、もしもし！ …なんだよ、チクショウ！

(効果音) (電話の呼び出し音)

一樹 あ、もしも、志村ですけど、あ、敏行、おれだよ。お前どうなった？ 教頭に呼ばれただろ？

敏行 (フィルター音)(声を潜めて) どうもこうもねえよ。ヤバいよ、ほんと。教頭は停学をちらつかせるし、おやじは怒ってもう高校なんかやめさせるって言うし。とにかく、お前んとこへはもう行けないからさ。しばらくはおとなしくしてないとな。悪いな、じゃ切るぞ。

一樹 チクショウ。どいつもこいつも、いざとなると人のこと見捨てやがって。

ナレーション 仲間だと思っていたやつらの冷たい態度に、おれは腹が立った。今まで気が合うと思って信頼していただけに、ショックだった。その夜、一人暮らしを始めてから、おれは初めて家族のことを懐かしく思い出していた。そして気がついたら、福岡の家の電話番号を押していた。

(効果音) (電話の呼び出し音)

一樹の母 (フィルター音) はい、志村ですが。

一樹 あ、もしも母さん？ おれ。

母 (フィルター音) あら、一樹なの？ 珍しいねえ、あんたから電話くれるなんて。何かあったの？

一樹 別に。

母 (フィルター音) そう。元気なの？ ご飯はちゃんと食べてる？ 面倒がってコンビニのお弁当ばかりじゃ、体壊すよ。

一樹 うん。

母 (フィルター音) あ、ちょっと待って。今ちようどおじいちゃんたちが来て、一緒にご飯食べてたのよ。みんな一樹と話したいって言うから、代わるわ。

祖父 (フィルター音) もしも、一樹、元気かね？ 学校のほうはどうだ？

祖母 (フィルター音) もしも、カズちゃん。東京は寒くないかね？ 体に気をつけてね。

親せきの子供 (フィルター音) 一樹兄ちゃん。学校がお休みになったら、遊びに来てね！

母 (フィルター音) もしも一樹、こっちはみんな元気だから、あんたも風邪引かないようにね。母さんたちがいないからって、だらしない生活して(途中から FO)ちゃダメだよ。ちゃんと勉強して、あまり夜更かしするんじゃないよ。

ナレーション 電話の声を聞くうちに、向こうの家の明るい、暖かい団らんの様子が目に浮かんできた。暖かすぎて、受話器を置いた瞬間、戻ってきた静寂が怖いぐらいだった。この部屋に自分独り。ここ数か月の生活で、当たり前になったことなのに、今日はなぜか、そんな独りぼっちな静けさがたまらなく感じられる。おれだけが、たった一人で取り残されてしまった。そんな思いに駆られ、その世はいつまでも眠れなかった。

<後編>

- ナレーション おれは志村一樹。青春高校の2年生、一応今のところは。なぜ“一応”かというと、もしかしたら退学処分になるかもしれないのだ。おやじの転勤のため、家族はおれを残して福岡へ移っていった。思いがけず手に入れた自由な生活に有頂天になったおれは、大人の目の届かないところで仲間たちと大いに盛り上がってしまった。その挙げ句、仲間の一人が急性アルコール中毒で倒れてしまい、結局、学校にも親にもバレて、今は近親処分の哀れな身の上だ。それにしてもショックだったのは、友達だと思っていたやつらが離れていったことだ。みんな、自分の身を守ることに一生懸命で、いざとなったら、学校や親の言うなりだ。最近はおれに寄り付こうともしない。そんなやつらなんか、こっちから願い下げだ。おれのほうから捨ててやる。そんな気持ちだった。
- 先生 志村、お前の処分が決まった。今回は嚴重注意ということで、反省文提出並びに朝学習で1か月間、早朝特訓ということだ。
- 一樹 じゃ、退学は…。
- 先生 退学はなしだ。
- 一樹 (大きなため息)助かったあ。
- 先生 ただし、だ。1つ条件がある。
- 一樹 条件？ なんですか？
- 先生 我が校では、やはり生徒の一人暮らしは認められんのだ。だから今のアパートは引き払って、どこか親代わりになってくれるような、身元のしっかりしたご家庭から通うように、ということなんだ。
- 一樹 そんな…。だっておれ、東京に親せきなんていないっすよ。それに、一人暮らししちやいけないなんて、校則に書いてないじゃないですか。
- 先生 バカもん！ この期に及んでまだ偉そうなことを言うのか。校則にないのは、それは、改めて言うまでもない大前提だからだ。特に、今回のような不祥事があったからには、学校としては、親元を離れた一人暮らしは、断固認めるわけにはいかんのだ。
- 一樹モノローグ なんだよ。それじゃ、結局やめろって言うのと同じじゃないか。チクショウ。
- ナレーション 自分のしてしまったことの、思いがけない大きなツケに、おれは途方に暮れていた。相談できる友達も今はいない。イライラをぶつけようにも、八つ当たりする相手もないのだ。「チクショウ！」とどなっても、その声は、ただ自分に返ってくるだけだった。
- 一樹モノローグ あーあ、もしこのまま、この部屋でおれが死んでしまっても、だれも気づかないんだよなあ。
- ナレーション 思わず、そんな弱気なため息をついてしまうような夜だった。その時だった。――

(効果音) (ドアをノックする音)
一樹 だれだ、こんな時間に？ 新聞の勧誘かな。こっちはそれどころじゃないんだよ。

(効果音) (ドアのノック音)
相沢潤 (オフで)カズ、おーい、いないのか？
(効果音) (ドアの開く音)
一樹 潤。どうしたんだよ。
潤 どうしたって、お前こそ、どうしてるかと思ってさ。大変だったみたいだな、いろいろ。
一樹 もう大変なんてもんじゃないぜ。もうお先真っ暗だよ。
潤 はいこれ、差し入れ。おふくろが作ったんだ。どうせろくなもん食ってないんだろ？
一樹 ありがてえ。サンキュー！ おおうまそう！…だけどお前、おれんとこなんか来て大丈夫か？ お前まで学校に目つけられるぞ。ほかのやつらなんて、それが怖くてもう来やしないぜ。
潤 関係ないって。別に悪いことしてるわけじゃあるまいし。それよりお前、これから先どうすんの？ ちらっと聞いたけど、もうこの部屋からは通えないんだろ？
一樹 うん、まあな。かといって、東京には頼れる身内もないし、親は、福岡の高校受け直せって言うけど、下手したら1年生からやり直したからな。もう参ったよ。
潤 カズ。おれ考えたんだけどさ。もしお前さえよかったら、うちに来ないか？
一樹 お前のうちに？
潤 ああ。うちの親も、「そうしたら？」って言ってる。うちに下宿して学校通えばいいじゃん。
一樹 それじゃ悪いよ、お前んちに。
潤 うちはいいんだって。お前とはガキのころからの付き合いだから、親せきみたいなもんだよ。
一樹 まさか、そこまで甘えられないよ。それにお前のうちは品行方正なクリスチャン一家だろ。おれみたいなのが行ったら、迷惑かけるぜ。
潤 バカだなあ、カズ。変な気遣うなよ。独りっつのは、ほら、何かと心細いこともあるだろ。
一樹 まあな。特に今度みたいなことがあると、なんか、しみじみ孤独を感じてしまうんだよな。
潤 分かるよ、お前の気持ち。
一樹 いや、お前には分かんないよ、こんなおれの気持ちは。なんか“人間って、結局独りなんだなあ”って思うんだ。この部屋でおれが独りで死んじゃってモ、だれも気づいてくれないんだぜ。

潤 そうだな。人間、結局、死ぬときは独りだもんな。

一樹 お前はいいよ。あんないい両親がいて、何不自由ない生活してるんだから。独りになったこともなくせに、分かったようなこと言うなよな。おれに同情してくれるのは分かるけど、人の気持ちを見通したようなこと言われると、ムカつくんだよな。さも“いい人です”って顔してさ。

潤 あ、そんなつもりじゃないんだ。悪かったよ。…だけど、お前の孤独な気持ちが分かるって言ったのは、口先だけの同情なんかじゃないぜ。おれも、独りぼっちだと感じたことがあるから…。

一樹 お前が？ 信じられないなあ。

潤 おれ、1年の時に足の関節を故障して、2か月ぐらい部活の練習を休んだらろ？

一樹 ああ、覚えてる。練習の虫みたいなお前が休まなくちゃならなくて、つらそうだったな。でも、もう完全に治ったんだろ？

潤 ああ、今はすっかりよくなったよ。けどあのころは、ケガのことでなんか悲観的になっちゃってて、悪いほうに悪いほうに考えちゃってたんだ。それに、あの時の医者が、「もしかしたら腫瘍しゅようができていかもしれない」なんていうからさ。家庭用の医学書で調べたら、もし骨肉腫しゅようなんかだと、おれぐらいの痛みが来てたら手遅れだと書いてある。あの時は本当に死ぬかと思ったよ。

一樹 お前、そんなこと一言も言わなかったじゃないか。

潤 ああ。なんか人間って、本当に怖いときとか、苦しいときって、人に言えないもんだな。幸い、検査の結果、何ともなかったからホッとしたけど、あの時の気持ち、恐らく一生忘れないだろうな。検査の結果が出るまでの何日間かは、生きた心地がしなかった。何を見ても涙が出そうになってさ。「ああ、おれがこの世からいなくなっても、毎日同じように朝が来て、バスが走って、庭の梅の花も毎年咲くのか」なんて思ったら、人間てはかないもんだなって、つくづく思ったよ。どんなに親しい人間でも、死ぬときは別々だもんな。

一樹 潤…。

潤 だけどな、カズ。おれ、矛盾してるようだけど、“死ぬ”ってのは怖いことは怖いけど、でも正直言って気が狂いそうなほどの怖さじゃなかったんだ。だって、死んだら天国に行けるんだからさ。

一樹 天国か…。

潤 ああ。お前も、ガキのころはいつしよに教会学校に通って、聖書のお話を聞いたじゃないか。おれは両親もクリスチャンだから、何となくそのまま教会に行ってて、自分もクリスチャンのつもりでいたんだけどさ。あの、病気で死ぬかもしれないって覚悟した時、初めて、“ああ、おれは死んでも天国に行けるんだ。確かに永遠の命があるんだ”って思えたんだ。不思議と安らかな気持ちだったなあ。

一樹 お前がそんなこと考えてたなんて知らなかったよ。いや、以前のおれなら、そんな話を聞いてもピンと来なかったかもしれないな。上辺だけの友達に囲まれて、気楽に、気ままに生きてたからな。でも今なら、お前のいうことが分かるような気がするよ。“独りぼっちというのはこういうことか”って、イヤというほど味わったからなあ。

潤 おいおい、そんなに落ち込まないでくれよ。カズ、聖書にはこうも書いてあるんだぜ。「二人は一人よりも勝っている。」って。(伝道者の書4章)一人が倒れても、もう一人が助け起こすことができるって書いてあるんだ。人は、やっぱり一人じゃ生きられないよ。親子とか、夫婦とか、友達とか、助け合える相手が必要なんだと思うな。それも、お互いが寄りかかって甘えるのとは違う。“本当は人間は一人なんだ”って事が分かっている人は、逆に助け合って、一緒に生きていくことができるんじゃないかなあ。自立した者同士だから、助け合えるというか、おれはそういう人間になりたいって思ってるんだ。

一樹 へえ。お前、すごいこと考えてるんだなあ。

ナレーション そう言いながら、おれはやけに大人っぽい潤の顔をまじまじと見た。彼の話を聞きながら、おれ自身も、以前の自分とは少し変わっていることに気づいていた。「周りに流され、甘ったれた過去の自分と決別し、本当の意味で自立した一歩を踏み出したい。本当の友と一緒^{トゥルー・フレンド}に…」そう思っていた。

(完)